

「知る」朝刊、「問う」夕刊

岸田文雄首相による内閣改造は「何が狙いの布陣なのか」(9月14日社説)と評され支持率も低迷。ならば外交で、と国連演説に臨み「人間の命、尊厳が最も重要」(20日夕刊)と説き「核なき世界促進へ30億円」の拠出を提言した。世界の研究機関を支援するというのが大谷翔平選手の年俸にも届かない額で反応は乏しく空振りのようだ。

「桐生悠々が問う覚悟」(10日)は恒例の命日社説。権力と向き合う「覚悟」と自戒を強調するのは記者向けなのか、社内報のよう。悠々は本紙の前身「新愛知」で内閣打倒の論陣を張り、その後「信濃毎日新聞」主筆の時に軍部批判で職を追われた。それから約一世紀、「信濃毎日、夕刊休刊へ」(13日朝刊)のベタ記事に悠々の晩年が重なって見えた。今年には北海道新聞や静岡新聞も休止した。紙や輸送のコスト増が実情だが「デジタル版移行」を掲げている。

しかし夕刊の役割は大きい。寄稿や特報に深みがあるからだ。山極寿一氏の「生物多様性を保ち『地球の厚み』守れ」(12日)では共生を支える国連教育科学文化機関(ユネスコ)の「文化多様性条約」をわが国が批准していない問題を学んだ。ブーチン氏を裁けるのか?(13日)ではウクライナの子ども連れ去りを戦争犯罪として逮捕状を出した国際刑事裁判所の審理やロシアによる露骨な脅迫を知った。「避難民、日本で困窮」(22日)ではタリバンに追われ日本に逃れたアフガニスタン人への外務省の仕打ちに落胆した。「一首のものがたり」(25日)が詠んだ加太(こうじ)の青春賦に目頭が熱くなる。そして本紙夕刊の王道は「大波小波」である。匿名の文芸批評だが、かつては大岡昇平、尾崎士郎、花田清輝らも執筆しており、1933年の第一回は芥川龍之介の自殺をめぐる文学論争だった。今年はこちらで90年!このコラムが数多くの逸材を育てたことはもっと知られてよい。

朝刊は世界の動きと政治・経済の縮図であり一瞥で「知る」ことができる。他方、夕刊は文化と人生の深層を「問う」ことで知的冒険にいざなう。デジタル版ではとても学べない。(静岡文化芸術大名誉教授)

2023年10月1日
中日新聞(朝刊) p.7